

進化経済学の再定義

塩野谷 祐一

1. 進化経済学の哲学的基礎

古典派経済学は、18世紀西欧啓蒙主義を背景として、ケネーとスミスによって確立された。新古典派経済学もこの系譜に属する。啓蒙主義の下で展開された科学的世界観は、合理主義、実証主義、経験主義、客観主義、自然主義などのニュアンスを異にする一連の概念によって表され、これが主流派経済学を支配した。啓蒙主義は、17世紀における自然科学の興隆を模範として提起された社会科学のための科学哲学である。私の考えでは、この種の科学的世界観およびそれに基づく古典派・新古典派の主流派経済学の中では、有意味な進化経済学の要素を見出すことはできない。18世紀の終わりごろから、自然科学的世界観に対抗して、理念主義、歴史主義、ロマン主義などのいわゆる「反啓蒙」の潮流が形成された。「反啓蒙」は、「迷蒙対啓蒙」に対して第三の道を提起したものである。カントの批判哲学による主観と客観との間の「コペルニクスの転回」にもかかわらず、主観と客観、精神と自然、意識と無意識との間に生じた二元論を克服する努力が、ドイツ観念論の展開を生み、一連の反啓蒙の思想に哲学的基礎を与えた。啓蒙における全体的対象の部分への分析、歴史的世界の棄却による知の一般化と普遍化、宇宙および人間のメカニズム観に対して、反啓蒙においては部分的対象の全体への総合、知の多様化と歴史化、宇宙および人間の有機体観が主張された。時おり、経済学にもそのような反主流の思想が現れては消えていった。今日の言葉で言えば、知の哲学的基礎としての「分析哲学」と「大陸哲学」との対比が、進化経済学の基礎を考える際の出発点となる。

2. 経済社会学としての進化経済学

経済学における「大陸哲学」の実践者の一人はシュンペーターである。彼のイノベーション概念は、「ロマン主義」のキーワードである“*Lebendigmachen*”（生き生きとしたものにする）を意味する。イノベーションに基づく彼の経済発展理論を進化経済学の元祖的パラダイムと解釈し、技術革新、市場競争、産業組織の動態を研究する方向を進化経済学とみなす方向があるが、それは単なる経済動態論の展開にすぎず、シュンペーターの解釈および継承としては狭隘である。イノベーション概念に加えて、彼は反啓蒙ないし反主流思想の中から「歴史主義」の要素を受け取り、「社会の全領域の相互依存関係を通ずる発展」という観念を経済学の中に確立した。彼の体系は、「経済静学・経済動学・経済社会学」の三層からなる。経済社会学は、経済領域とその他の社会領域とがそれぞれイノベーション（慣行的秩序の破壊）を遂行しつつ、それらの相互交渉を通じて、経済とそれを取り巻く諸制度とが全体的に進化する姿をとらえるものであって、総合的社会科学の一例を与える。進化経済学は経済に焦点を置きながらも、社会全体が内生的に変化する過程をとらえなければならない。経済領域の中だけで歴史的発展過程を説明することはできない。長期においては、あらゆるものが変化するからである。シュンペーターにおいては、進化経済学と呼ぶものは経済社会学である。

3. 経済学史における進化経済学の所在

シュンペーターの三層の理論体系に照らして彼の経済学史の叙述を見ると、彼の『経済分析の歴史』におけるいわゆるパラドックスを解くことができる。通説におけるパラドックスとは、シュンペーターがワルラスを最高の経済学者と評価しながらも、実際には、経済学の歴史を静学的一般均衡理論への収斂の過程とはみなさず、それとは無関係な歴史的背景や経済思想に大きな比重を置いているというものである。『経済分析の歴史』は、実のところ、三層の理論を念頭に置いて、(1) 静学的一般均衡理論、(2) 動学的一般均衡理論、(3) 経済社会学的一般均衡理論の歴史的系譜を追求したものである。(1)はワルラスによって成就されたが、(2)については、20世紀の経済動態像をめぐるケインズとシュンペーターとの対立が陰伏的に提起された。(3)については、社会の総合的把握の試みとして、主流派経済学の外にあるコント、マルクス、シュモラー、ウェーバーなどが取り挙げられた。シュンペーターは、コントの機械論的世界観を別として、他の三者にはしかるべき評価を与えつつ、自分の経済社会学との比較を行っている。この三者およびシュンペーターはいずれも「大陸哲学」とドイツ歴史学派の本質的要素(社会生活の統一性と発展)を継承する点で、進化経済学の要件を満たしている。三層の理論を通ずる彼の一般均衡への執着は、社会生活の統一性としての秩序観を反映したものである。

4. 進化経済学の知の性格

進化経済学をシュンペーター的な経済社会学と定義した場合、それは「分析哲学」と対比される「大陸哲学」に基礎づけることによって、その可能性を伸ばすことが期待される。実証的・自然科学的知識以外に知の存在を認めないのは、かつて啓蒙主義が排斥した因習と信仰の一種に他ならない。「分析哲学」に対する「大陸哲学」(ないしポスト・モダニズム)の存在形態は、「科学対前科学」ないし「科学世界对生活世界」とみなされる。進化経済学(経済社会学)は経済静態論や経済動態論とは異なる次元の知として自覚すべきである。それは議論されるべき問題像を「ヴィジョン」として提起し、「レトリック」の方法によって叙述することに甘んぜざるをえない。また経済社会学が制度経済学であり、制度が「社会組織」であると同時に「社会規範」であることを想起するならば、進化経済学は経済と規範的価値との関係を明示的に「イデオロギー」として論ずべきである。伝統的に哲学的知の三分野である「存在論・認識論・価値論」は「メタ科学」であるが、それらは、知の起源としての「前科学」の三分野である「ヴィジョン・レトリック・イデオロギー」に対応する。コント的な実証主義と機械論の精神によって進化経済学を構築するのではなく、歴史主義・ロマン主義・観念論の精神に立って「生活世界」の中から「前科学」としての進化経済学のあり方を試行すべきである。その際、少なくとも、社会現象に関しては、社会科学の学際的研究(PPE&S; Philosophy, Politics, Economics, and Sociology)が不可欠である。自然と人間と社会を包摂する学際的研究に関しては、芸術と科学と倫理の統一を図るロマン主義的観点が必要であろう。